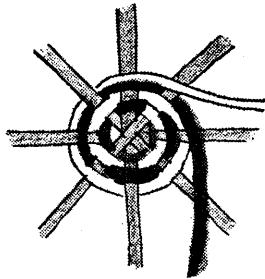


はしがき

近代短歌に現われた子ども(一)

大塚 雅彦



しかし、短歌といつても万葉集以来、何千年の長い歴史がある。古代でも山上憶良の「宴を罷るの歌」「子等を思へる歌」等の秀作が万葉集にあり、近世では橋曠覽の「独楽吟」の中のすぐれた子ど

私は学生時代から長い間短歌を作り続けているが、過去の歌人たちのすぐれた作品を読むのも好きで、ひまさえあれば短歌史上の作品に親しんできた。ところで私は児童学科に勤務している関係で、短歌史の上で子どもがどんな風にうたわっているかということに、最近つよい関心を持つようになつた。そこで、子どもを素材にした短歌にどんなものがあるかについて、多少まとめて考察してみよう、と思い始めた。

も詠等、ちょっとと思いつくだけでも、子どもをテーマにしたもののが少くないから、丹念に探したら、随分この種のものは見つかるだろう。そこで今回はあまり欲ばらないで、近代短歌に限って扱うことにした。

近代短歌といつてもかなり期間は長いが、その始期はいつ頃かについては学者や歌人の間に色々な説がある。しかし大体、明治三十年頃を近代短歌の成立期とみなすのが、大方の説のようである。というのは三派鼎立とも

いうべき正岡子規の根岸短歌会の成立（明治31）・佐佐木信綱の「心の花」（始め「心の華」）の創刊（明治31）

・与謝野鉄幹の新詩社の結成（明治32）の三つが、明治三十年代の初期に期せずして行われているからである。

近代短歌と現代短歌との接点をどこに置くかについても、種々の考え方がある。『日本近代文学大辞典』（講談社）で「近代短歌」の項目を執筆した木俣修博士は「だいたい大正期までを近代短歌と呼ぶのが一般となつてゐる」と述べているがそれは一応の基準であつて、「近代短歌」という題名で昭和期をも含めて扱つてゐる概説書も

あるし、逆に「現代短歌」という題名でありながら、明治・大正を含めて扱つてゐる書物もある。そこで私としては、大体、旧派和歌に對して新派短歌が成立したと思われる頃から始めて、戦後の最近の著名歌人たち（現役の）に至るまでを漠然と含めて扱うことに致したい。編集部がこの連載を何回続けさせて下さるのかわからないが、しばらくおつき合い願いたい。

(1) 与謝野鉄幹

①子の四人よたりそがなかに寝る我が妻の細れる姿あはれとぞ思ふ

②五人の子等いっただりが冬着ふゆきに縫ひ直しさもあらばあれ親はきずとも

③その父はうちわざわらわ打擲うちねすその母は別れむと云ふあはれなる児等こら

④蜜柑箱みかんばこふたつ重ねてめりんすの赤き切きしく我が子等こどもの雛

⑤わが家の八歳の太郎が父を見てかける似顔は泣顔を
する

⑥さびしげに群をはなれて小学の庭に立てるは父に似
るかも

⑦わが家の五歳の次郎ふくらふの目つき大らかに語す
くなし

⑧わが次郎あぐらを組めば斧を持つ人形の如くひざば
しが出る

いすれも歌集『相聞』から抄出した。『相聞』は鉄幹
の第七歌集で明治四三年刊、上田敏への献辞があり、森
鷗外の序文がある。挿絵や装幀は高村光太郎である。「明
星」後半期の注目すべき歌集で、鉄幹の歌風の円熟が見
られる。鉄幹は四十才ちょっと前の壯年期にあたつてい
たが、「明星」は明治四十一年に廃刊、文学活動の上で
も、また、多くの子をかかえて生計も貧しく、生活的に
もすこぶる苦しい時期であった。

あの輝かしい『みだれ髪』の著者であった妻晶子も、
光・秀・八峰・七瀬の四児を育てつつ、苦闘していた。

鉄幹は「光、七瀬、秀、八峰といりまじりわが幼児」の手
をつなぐ遊びとその子らを歌い、また生活やつれした
妻を見て「わが妻のかたちづくらなりたるを四十に近
きそその夫子の泣く」と、おのれのふがいなさを自嘲する
かのように詠じているが、①の歌もその妻子の姿を描いて
いる。

中畠同志社女子大教授はこれらの歌を「晶子への哀憐
の情をこめた、身にしみるような作」（同氏著『与謝野
鉄幹』昭56・2刊）と述べているが、子どもたちをおも
う親心の歌としてもすぐれており、それは、子どもたち
の衣類としてつくろい物をしてやつて、親の方は着なく
てもかまわないのだ、という②の歌にもよく現われてい
て、しみじみさせる。この頃は生活も窮迫し、種々の意
味で心情的にも鉄幹は失意の時期であり、夫婦仲も険悪
になつてフト夫が妻や子を殴り、妻が別れ話を言い出す
といった場面もあり、幼い子どもたちが心を痛めたとい
うこともあつたらしいのが③の歌である。

余談であるが、私は家庭裁判所勤務当時、離婚調停の

席で相争う両親を見て、幼い子どもが不安におののくような表情を浮かべていた姿に接し、たまらなく胸が痛んだ思い出がこの歌を読むと蘇るのである。しかし貧しい中にもたのしみはあるもので、鉄幹は「あたたかき飯に日刺の魚添へし六人の夕がれひかな」（夕がれひは夕飯のこと）ともうたっているが、④の歌も貧しき家の雛祭りをあわれ深く詠じている。この「子等」というのは明治四十年に生れた女児の双生児である八峰・七瀬（命名は森鷗外）であろう。蜜柑箱を二つ重ねて、その上にメリソスのうすい布切れを敷いて雛壇にするという素朴さは、こんちの昭和の繁栄社会では思いも及ばないが、実際にわれわれの幼なかった古き時代にはあったことであり、このリアルな具体的描写がこの歌を味わい深いものにしている。

さて鉄幹夫妻の長男光氏は後年、医博・東京都衛生局长となり、また次男秀氏（故人）は後年、文才のある外交官となり（夫人は『どつきり花嫁の記』等の著で知られた与謝野道子、それぞれ知名人となつたのであるが、

その両児の幼時をうたつたのが⑤から⑧までの歌である。⑤⑥は光氏をテーマにしたもので、太郎といふのは「去なしよ去なしよ」と思っていたが、太郎が生れて去なされぬ（婚家の仕うちがあまりにも冷たくむごいので、嫁の私は、いっそのこと飛び出してやろう々々々、といつも考えていたが、長男が生れたのでもう飛び出せない、その意）といふどこの地方の民謡にもあるように、一般に長男を指す。

⑤にはやはり自嘲をこめたペースがあり、⑥はどこか孤独がちに見えるこの息子は、父である私に似ているのではないか、という「同病相あわれむ」式な複雑な親の悲哀がにじんでいる。⑦⑧は次郎、つまり次男の秀氏がモデルであるが、同氏の幼き日の風貌がこれらの歌には大へんユーモラスに描かれている。鉄幹の歌にはこういう面もあつたのである。

⑨泣顔を隠さんとして病める児の熱ある頬をば吸へる
その父

⑩病める児は赤いたましその母の寝たらぬ顔は青し
醜し

『解の葉』所収。鉄幹の第八歌集で明治四十三年刊。両作品とも歌意は明白であろう。⑨は病児への父性愛を示し、⑩は看病疲れで醜くなつた妻と、高熱で赤い顔をしている子どもを描いてゐる。この病児はチフスを病んだ長男を指すようだ。「窒扶斯チフスを病めるわが太郎、また夕方は四十度に、熱こそ昇れ詭言に……」と短詩風にうたつた作品があるからである。

(2) 与謝野晶子

- ①五人ははぐくみ難しかく云ひて肩のしこりの泣く夜となりぬ
②夜をこめて小き襯衣ちふいを縫ひいでしよろこびなどもあはれるなるかな
③子等の衣きぬ皆新しく美くしき皐月さつき一日花あやめ咲く

しかし超人ではない生マ身の人間であるから、短歌に

前述の如く晶子は育児や生計のために大奮闘したのであるが、次男の秀氏は後年「千駄ヶ谷時代は既に明星の末期であり、世間的には華々しかつた筈であるが、詩人の生活といふものはいすこも同じであり、今日では想像も出来ない程惨めな所もあつたと思う。当人達はその割に平気なもので、苦労したのは唯台所を預る母一人といふわけであつた」(同氏著『一外交官の思い出のヨーロッパ』昭和56・10)と述べている。質屋も随分利用したり、原稿料を取りに出版社へ小学生の光や秀が行かれ、随分と待たされた話も伝えられている。晶子は実に

十一人の子を育てたが、「おおせいの子供を育てながら仕事にいそしむことのできたのも、人に倍する健康な身体と力を持つていたからであろう」「持つて生れた徳といふのか、どんなに貧乏していても、苦労していても余裕と自信を持っていて、ひとには決してそんな感じを与えたなかつた」(秀氏、前掲書)といふ。

は①のようすに率直に苦労についての愚痴のようなものを詠出している。五人（前述の四人に加うるに、その後生れた三男の鱗）の子を育てる生活苦をうたつた作として、実感がある。「肩のしこりが……泣く」と擬人化して客観的な言ひ方をしている点に注意したい、と新聞進

るたび

⑤その母の骨ことごとく碎かるる苛責の中に健き子の生れた三男の鱗）の子を育てる生活苦をうたつた作として、実感がある。「肩のしこりが……泣く」と擬人化し

啼く

⑥あはれなる半死の母と息せざる児と横たはる薄暗き床

一青山学院大教授は述べている（同氏著『与謝野晶子』昭和56・12）。この歌は第九歌集『春泥集』所収である。

②と③は第八歌集『佐保姫』に收められているが、②は貧しい生活の中にも子らのために母としてつくす喜びをうたつていて、心うつものがある。

③は新詩社同人の平野萬里が「晶子さんは……その本質はやはり抒情詩人であった。何よりの証拠はその衣装道楽である。女らしさと芸術家氣質とが混合したものであろう。従つて少しでも余裕が出来れば御子さん方の衣類も新調されたであらう。従つて斯ういう歌が出来るわけである」（平野『晶子鑑賞』昭和24・7）と、この歌について述べているのが参考になる。

抄出した三首は一種の悽愴味すら湛えていて、殊に④

などは鬼氣せまるような象徴的な比喩がある。世には出産をうたつた歌は少なくないが、死産をうたつたものは

あまりないのであるまい。⑤は生まれた子、⑥は死産した子をそれぞれ描き、かたわらに臥す母である自らをも描出している。

(3) 落合直文

順序からいえば鉄幹よりも、むしろ直文を先にすべきであろう。直文は明治二十六年「浅香社」を結成して短歌革新の第一歩を踏み出したが、鉄幹はその門下の一人だからである。ただ直文の歌風は清新な趣があり、すぐれた作品が少なくないが、未だ旧派の詠風を抜けきらぬ新旧折衷のところがあった。その中で、子どもを素材としたものに佳作が多い。

①父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり
②霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのばゆ風の
寒きに

③明けなばと羽子板だきて母のもとに寝たるわが子よ

罪なかりけり

④父と母をいづれがよきと子に問へば父よといひて母をかへりみぬ

⑤さくら見に明日はつれてとちぎりおきて子は寝ねたるを雨ふりいでぬ

⑥小屏風をさかさまにしてその中に寝たるわが子よおきむともせず

直文は東大古典講習科に学んだ国文学者で、のちの一高・早大を始め多くの学校で教鞭をとったが、生来身体が弱かったのに励精したためか、僅か四十三才の壯年で明治三十六年に逝去している。家庭的にも不幸で、鮎貝家から養子に入ったが最初の妻竹路（彼女との間に二人の男子を挙げた）とは離婚し、二度目の妻操子との間に四男二女が生まれたが、その中、二人の男児と一人の女兒は乳児で死亡している。直文は家族をいとしみ、門下を愛し、交友に情義の厚い、誠実な人物だったようであ

る。生前に歌集なく、没後に門人らの手で『萩之家遺稿』『萩之家歌集』（萩之家は直文の号）等が刊行されている。

①は「明治三十二年の春、病にふしてよめる歌どもの中に」と詞書のある連作中の一首である。上野山に花が盛りだ、という報などを聞きつつ、作者はたれこめて久しく病んでいるのであるが、この「問ふ子」は當時七才の次女澄子だといわれる。「上句は芝居がかつて仰々しく、下句は〈問ふ子を見れば〉が間のびしている。歌としてはアンバランスで決して成功作とは言えない。……しかし、人間味のある氣息がまつわっている。」と前田透成蹊大教授は述べている（同氏著『鑑賞 直文・槐園・躬治』昭52・6）。し、本林勝夫共立女子大教授は「今朝はいかにと手をつきて」という表現に抵抗を感じるだろうが、今なら〈お父さん、どうですか〉といったところである。きちんとすわって朝の挨拶をするというのも武家風なしつけ方の残っている家庭ではふつうことだし、その素直さがかえって作者の心にいじらしさをそそ

るのである」（同氏著『現代短歌』昭41・11）と鑑賞している。

②は翌三十三年作だが、これまた真情溢れる作で、私は大好きだ。私は旧制中学時代にこの歌を国語教師に教わって以来、今もって長く愛誦している歌なのである。「安房にて」という注記のある一首で、この「わが子」というのは明治三十年に双生児で生れた直兄（弟直弟は夭折）だろうという（前田、前掲書）。子どもの状況が眼に見えるようである。直文は「明治三十二年十九才の時に糖尿病となつて、駿河台の病院に入院し、さらに湘南や房州などに転地するようになつた」（矢吹弘史『落合直文』昭和18・6）。この②は療養のため千葉県北条町（現在の館山市）の海岸に転地（明治三十三年一月）した頃の作であろう。「しのばゆ」は「しのばれてくる」の意。

③から⑤までの歌も、いずれも子どもたちの生態を実に活き活きと伝えている。「明日になつたら羽根つこう」と羽子板を抱きしめて寝る子、「お父さんが好き」と答え

ながらチラと母親の方を盗み見る茶目つ氣のある子、「明日は花見に連れてってね」とせがみつつ子は寝たのに雨が降り出したうらめしさ——。いずれも子煩惱の父親である作者が髪飾し、人間直文をよく示している。

⑥は深刻な歌だ。「子のうせにし折」と注記がある。一、二句に死出の床であることを示し、夭折したもの言わぬ子を空放したよううたつていて表現が、却つてあわれ深さをつたえている。「温情溢るるという態の人」（矢吹、前掲書）といわれた直文の歌は、子どもをうたうときにその人柄を端的に示したように私には思われる。

(お茶の水女子大学)

